令和元年度　第２回鶴岡市子ども読書活動推進委員会　会議録

○日　時　令和元年９月２７日(金)　午後３時～

○会　場　鶴岡市立図書館　講座室

○次　第

１．開会　教育部長

２．教育長あいさつ　教育長

３．協議

（１）第２次鶴岡市子ども読書活動推進計画について

① 計画の対象及び構成について　図書館長

② 方針について

③ 計画の数値目標について　事務局

④ 具体的な取り組みについて

（２）策定スケジュールについて　事務局

４．その他

５．閉会　部長

○出席委員

樋渡美智子委員、井上裕子委員、三浦洋介委員、五十嵐良二委員、遠田達浩委員、本間俊美委員

○欠席委員

中村ちか子委員、菅原美穂委員、三浦宗平委員

○市側出席職員

教育長：布川敦　　教育部長：石塚健　子育て推進課長：渡会健一

学校教育課長：尾形圭一郎　社会教育課長：佐藤嘉男　健康課長(代理)母子健康主査：若生幸　図書館長：松浦幸子

健康課保健師　白井香帆　子育て推進課主事：白幡佳純　かたばみ保育園保育専門員：佐藤裕美　学校教育専門員：若月美智子　社会教育主査：五十嵐依久子

図書館主査：舩岡里佳

○公開・非公開の別　　公開

○傍聴者の人数　　０人

質疑・協議

（１）第２次鶴岡市子ども読書活動推進計画について

①計画の対象及び構成について

②方針について

（委　員）

長年ボランティアをしている。大きなテーマになっているが、私たちはちいさなことからコツコツと子ども達の心に届くように活動している。

読書推進もそうだが、心豊かに成長してほしいという思いで取り組んでいる。推進というと貸出冊数とか数字で表さなければならないが、内容の充実、選本の充実が大事だと感じている。

（委　員）

言葉が非常に平易で、文言が市民の皆さんに理解できるような言葉を使っていること、非常にスリム化されているということ、逆に言えば現場で、色んな形で活動している人たちに対して信頼を感じる。がんばってくれよと 最低限の事柄が書かれていて現場を力強く後押ししてくれるような計画ができていると感じる。

計画の背景として国の動向、県、鶴岡市、社会情勢とあるが、これはあくまで鶴岡市の計画であるため、国、県、社会 がどういうふうに、子どもの読書を支えているのか、社会どうなっているのかがあり全部を受けて鶴岡市の動向となるのではないか。（順番の話）

前回の１次計画で保護者のアンケートもとっているが、二極化している状況、学齢が上がるに従って親が離れていくという状況も見えたが、ＰＴＡの活動が盛んに行われている。県Ｐ連も読書に力を入れているし、鶴岡市も力を入れている。ＰＴＡの動きなども実態の中に、昨年までの活動のことも受けながら情勢について入れていくといいのではないかと。

対象だが、このプレママから始まっているという考え方が大変良い。この時期からすでに読み聞かせは始まっているので、子育て支援の方でも、研修会などされておりとても良いと思う。

対極的な面からいうと、高齢の方も本を喜んで読み聞かせを聞いている。赤ちゃんからお年寄りまで幅の広い、子どもの読書を支える人々の年齢というのは広くなったとすれば、プレママもあれば、高齢者の方も入れてはいかがか。大人という表現でくくってはあるが、具体的に言えばそこまで入るのではないかと。

構成もすばらしい、基本的な方針が非常にわかりやすく、“子どもの近くに”と文頭表現が揃っているというのも非常にインパクトがあって良い。

（会　長）
では、改めてこの読書活動計画を子どもの第２次計画として進めていくということでよろしいか。

（委員一同）
はい。

（会　長）
承認をいただいたので、進めさせていただく。

③計画の数値目標について

（委　員）
学校でまったく本を読まないとあるが、朝読書をしているのになぜこの数字になるのか不思議であるが、朝読書を読書と認識していない児童、生徒がいるのかと。これが読書だと教えないとわからない児童、生徒もいる。
ただ、これで数値的に意味があるのか。そのあたりをどう考えるのか、計画として形にならないからと考えるのか。

（委　員）
この数字をどう読み取るのか確認したい。朝読書を取り組んでいるがどうしてこの数字になるのか。

（事務局）
朝読書を小学校、中学校、全校で実施しており、なぜこの数値になるのか疑問なところではあるが、子どもたちの中で、このアンケートの質問を「自主的にしてる読書」として捉え、朝読書はそれに含まないと考えたのではないか。こちらのアンケートの質問が、子どもにもっとわかりやすい形でとらなければならなかったかと。

（委　員）
どこをもって本を読んだと考えるのか、本を読まないことはない。現在の教育活動で教科書にないようなことも、自分たちで調べてまとめるということもしている。もちろんインターネットもあるが、本からの情報を得ることもしている。認識の仕方で、「家での読書」といわれると「趣味での読書」ということになるのではないか。そのためにこのような数字になるのかと想像する。

本に触れたことがないのかと聞かれれば、もっと低い数字になるのでは。

（委　員）
数値目標というのは、推進計画というものには成果としても必要なものではあるが、蔵書冊数にしても今、またこれからも子どもの数は減少している状況で、この数字に果たして意味があるのか。
武雄市の話題の図書館を訪ねたが、そこはツタヤが入っている図書館となっていた。山形県（県立図書館）が参考にしていた図書館のひとつだが、入りやすさなど図書館のハード面に関して、行ってみたい場所という印象を受けた。子ども達にとっても、あそこに行くといいことがある、行きたくなる図書館であることも大事なのではないかと。ここで（鶴岡）いえば、親子で週末に寄れるような場所になればいいのかと。
先ほども、本の選定についてあったが、とてもだいじな部分だと思う。図書館に関わる人として高校の場合、学校図書司書がいるが、その人たちが力量を高められていくなど、研修などをしていかないと。推進計画だけ進めていっても、実際の中身はどうだったのかということになる。
計画に並行して、司書の方々が不足しているのであれば充実ということも含めると、より読書活動の推進につながるのでは。
鶴岡南高等学校山添校さんでも取り組んでいると聞いているが、ブックトークや読み聞かせ等高校生でもできるようなことを地道な活動ではあるが、高校生も巻き込んでいきながら、子ども達に伝えていくことができるのではないか。

（会　長）
数値目標の陰にあるもの、もう少し考えていかなければならないのかとも思うが、数値目標を設定するかしないか、設定するのであれば何を根拠にするのか、難しい問題ではある。

（委　員）
数値目標を設定すれば、追わなければいけない。数字より内容を充実させたい。

（委　員）
最初の項目、蔵書数となると予算も関わってくるが、鶴岡市では５年後の子どもの数、蔵書数など算定してどの程度増やしていくのか考えているのか。数字を追うことで内容の充実が果たして得られるのか。
蔵書数だけを追うのではなく、図書館においていい本を所蔵することの方が重要なのではないかと。この目標に本当に意味があるのか。下項目は、図書館の魅力を

伝えることによって、努力して追う数字であり読書活動推進ということで、結果として現れるものだと思える。

（子育て推進課長）
　子どもの数は減っているが、目標としての数値があっても悪くはないのでは。子どもの数も予測はしているが、必ず減ると断言するものではなく、これから変わっていく可能性もないわけではない。

（図書館長）
　蔵書冊数の目標だが、図書館において児童図書の冊数が狭められることがないように大事なものとして購入していく、目標達成だけを考えているのではなく、子ども達に本が行き渡るようにいていきたい。
　また、本があればなんでもいいものではなく、古い本は除籍し一定の基準を超えた児童図書を市立図書館として所蔵していくという宣言的なものと捉えていただければ。

（委　員）
　学校では分類毎に所蔵率があり蔵書を揃えていくわけだが、市の図書館として児童図書の割合などはあるのか。

（館　長）
　国で出している数値など特にない。児童書に力をいれているところ等それぞれの図書館で力を入れているところは様々であり、分類毎の所蔵率として決められた数値はない。
　この計画を掲げている鶴岡市としては、この程度揃えていきたいという目標であり、この数字だけではなくこれからも児童図書を揃えていきたいと考えている。

（委　員）
　除籍もあり、新刊も入れていかなければならない。どんどん増えていく訳ではないのでこの数字は厳しい目標だと思うが。

（委　員）
　山形県の第３次計画９ページを見ると、図書標準にまだ達成していないことがわかる。平成２４年から５年間で 1,000 億円の地方交付税を出しているが、本当に子ども達に、図書購入費として配分されているのかこの場では追求はしないが、それぞれの市町村で年々、蔵書数というのは上がってきており関心は高まっているが、

まだまだ十分ではないという意識を持たなければならない。
　現場では新しい本、学習に役立つ本が揃っているのか。いざ先生方が授業で使おうとするとデータが古い、図鑑類が古いとか、パソコンであれば何でも調べることができるが、「調べ学習」というのは、行ったり来たりしながら身につくものである。（学校図書館では）まだまだ足りないという、現場の先生方の声が聞こえてきている。
　そういうことを考えると、これを理想として「8.6」という数値は有難い。限りなくここに近づく、努力するということであり、数字の基準、目指すものがないと励めないこともあるため必要ではないかと。

　高校生の不読率ということで文科省が調べたときに、一番の理由が「他の活動で時間がなかった」ということが６割を占めている。「他にしたいことがあった」とうのが 47.3%。
　ところが、時間がないとか他の活動が忙しいと答えた子どもは、言い訳ではなくて本が好きな子が多いそうである。他の統計と比較すると、普段から本を読んでいないという生徒の３割は、どちらかというと中学校まで読書の習慣がついていなかったという理由のようである。
　不読の理由の中にも、本は好きだけども時間がとられるという子と、習慣が付いていなくて読みたくないという子といるので、単なる数字だけで不読と考えるわけにはいかないし、分析が非常に大事になってくるのでははいのかと。
　国の数値目標だが、鶴岡市の平成２５年度までの数字で見ると、かなり下がっているように見えるが、かといって第４次計画の国の「高校、中学生」の数字と比較しても厳しいのではないのか。「小学生」は可能な数字かと思うが、あまり急激な数字ではない方がいいのではないか。

（会　長）
　数値目標について、まだ課題もあり、（事務局で）検討するということでよいか。

（委員一同）
　はい。

（事務局）
　いただいた意見を参考に、まったく数値目標がないという計画にはできないが、何を継続させていくか等検討させていただきたい。

④　　具体的な取り組みについて

（会　長）
具体的な取り組みに対して、保育現場としてはいかがか。

（かたばみ保育園）
愛着関係につながる計画となっていいて良いと思う。今の子どもたちの「相手の思いを理解する」ということに対して、年々気になるところである。相手の思いに気づくというのは、赤ん坊のときからありのままの思いを出して、それを大人から受け止めともらうこと、共感してもらうこと、豊かな応答的なやり取りをすることが、今度は相手の思いにも気付くことになる。
それは絵本を通してもできることであり、「うれしい、楽しい、悲しい」という思い、気持ちを、絵本を通して保育者から言葉にしてもらい思いに気付く。そのようなことも載せていくとわかりやすくてよいのでは。
３・４・５歳児は、この時期になると字が読めるようになる。「自分で読みなさい」となる家庭があるが、子どもがもっと読んで欲しいという欲求は、お話が楽しいだけではなく、それ以上に読んでもらったときの愛情を感じ入るところでもある。もっとその時間を味わっていたい、抱っこしてもらった体の感触から心のぬくもりを受け取り、自信や自己肯定感につながっていく。そのようなことをわかりやすい言葉で、具体的に載せるといいのかなと。

（委　員）
おはなし会に依頼されていくが、そのあとに読書、読み聞かせの意義等、保護者向けに話をしてくれないかという依頼があるが私たちだけでは難しい。愛着が大切だということを伝えること、楽しいお話会と、（読み聞かせの）意義の話も一緒に必要かと。

（委　員）
親子読書というよりも「家読」という、おじいちゃんも赤ちゃんも場合によってはペットまで、家庭全体で読書に関わっていこうという取り組みが、全国的に進んでいる。
ペットが載っている本をペットといっしょに読み、楽しいという感想文もある。家じゅうで本を読むという家読を鶴岡ではそれをどのように採用するか、検討していただきたい。
親子とすると親だけになる、意識が家庭での読書につながっていかない。家庭で

の読書が大事だと言えばいうほど、家庭では誰を対象にしているのか、赤ちゃんからペットまで、そういう広がりをもたせるような文言が少々欲しい。

（委　員）
　中学生の部分を見ると、とてもよく中学生を捉えていると感じる。一段と多忙、嗜好の変化、様々な要因で読書離れとなっている。一旦（読書から）離れるが、また戻る時期が来るようにと書いてある。正しい認識だと思う。

（２）スケジュールについて

　特になし

（会　長）
　　読書活動を推進するための取り組みとあるが、一つ言葉が欲しいなと思うのは、「望ましい子どもの読書活動」とすると、先ほどの親と子と、家族との読書と、とてもいいことだと思う。心につながるようなものなることを願って、私から最後に付け加え終わります。